平成 27 年度みんぱく若手研究者奨励セミナー　発表要旨

フィールドワークからみる修道院手話「手まね」

柴田香奈子

厳律シトー修道会では、「手まね」と呼ばれる修道院手話が保持されている。現在ではその使用は限られてはいるが、これまで各修道院における修道士同士のコミュニケーション手段として、また畑や様々な作業場での合図や指示のために用いられてきた。

本修道会は、1662 年にフランスに創立された修道院に起源を持ち、基本的に外部から完全に閉じられた宗教的な共同体である。修道士の生活の基本にあるのは 6 世紀に書かれた『ベネディクトの戒律』であり、現在もこの戒律に従って生活を律している。修道士は、日々の大半を“沈黙”の中で過ごし、この“沈黙”の戒律遵守のために、何百年にもわたって修道院手話「手まね」を用いて生活を営んできたのである。しかし、カトリック教会の現代への適応化が図られた第二ヴァチカン公会議（1962～1965 年）以降、各修道院でその使用は減少し、今では「消えゆく言語」として考えることもできる。

これまで修道院手話については、音声言語を母語とする修道士が、戒律の“沈黙”を守るために使用する「身振り」のようなもの[1]であって、「言語」として扱われることがなく、一般的な言語学の研究対象とはされてこなかった。よって、「手まね」の発話分析などの記録や研究は見当たらない。また、現在唯一「手まね」を使用していると考えられる厳律シトー会は、一般世間と距離をおきながら生活をし、学術調査にも非常に慎重な姿勢をとっている。そのため、「手まね」が使用されているという事実は公にならず、様々な研究領域からの注目も少なく、その実像は未だ明らかになっていない。

本発表で考察するのは、各修道院における「手まね」の有様と伝承についてである。宗教的に閉ざされた中、その母体においてどのように「手まね」は伝承され、現代社会への適応はどのようなものなのかについて、自身のフィールドワークから検討をおこなう。考察は、「手まね」の熟練者がわずかに残るドイツと日本の修道院（計 5 カ所）での、およそ 5 年の断続的な参与観察によって収集したデータを用いる。特に女子修道院における記録はこれまでに報告がなく、極めて貴重な分析データとなっている。

発表では、話すことが許されていない“沈黙の掟”の基で、修道士は「手まね」をどのように使用しているのかについて、「手まね」による発話や語りに注目し、言語学的な分析を加えて紹介する。そして、調査によって明らかになった「手まね」の使用の実態から、共同体内にお

---

[1] Barakat, R. A. (1975): *The Cistercian Sign Language: A Study in Non-verbal Communication*. Spencer, MA: Cistercian Publications, Inc.

ける「手まね」の伝承と諸相について、内的資料や歴史資料等も踏まえて考察したい。